

今年は梅雨明けが遅れているようで、7月半ばを過ぎても30度を超える日が少ない。セミたちは梅雨明けを待てずに次々羽化して出てくる。そんな7月半ばに、南校舎の玄関横の樹でさえずる鳥に気付いた。近寄ってみたが背中がくすんだ青灰色で所々に白い斑がある。腹側はレンガのような赤橙色である。「これは、イソヒヨドリの若鳥か？」カメラを持ち合わせていないので、記憶に留めるために近づいてひたすら凝視した。記憶を元に図鑑を調べると、ヒメイソヒヨドリが似ているように思った。

翌週の午後、校長室の窓に聞き覚えのあるさえずりが聞こえてきた。

「きたっ！」私はカメラをもって階段を駆け下りる、とストップやり直しなのでゆっくりと玄関に向かった。3日前に見た鳥が時計塔の上で鳴いている。気付かずに近付いて来た人を、『写真を撮ってます。騒ぐでない』と眼でおさえ、鳥に接近してカメラを向けた。怪しげな男の接近にも動じずに鳥はさえずりを続けている。今度はバッチリ撮影できた。

写真をもとに詳しく調べると、やはりイソヒヨドリの若鳥（雄）であると判明した。イソヒヨドリはここ数年でよく見かけるようになった。最初に見たのは20年ほど前、三田の人と自然の博物館の駐車場だった。青い鳥は珍しかったので、写真に撮って調べて、イソヒヨドリと知ったのだ。名前からもわかるように、もともと海岸近くなどで見られることが多かったのだが、近年はいろんな場所で見える。明石でもよく見かける。

イソヒヨドリは、見かけはヒヨドリと似ているが、ヒヨドリ（ヒヨドリ科）との類縁はなくヒタキ科の鳥である。日本にいるイソヒヨドリは、暖地では渡りはしないようだ。図鑑にはあまり人を怖れないとされているが、間近で撮影しても逃げなかったのは、その性質のせいだ。雄は頭部と胸、背が青く、腹がレンガ色と特徴的な目立つ色合いだが、雌は灰褐色とオリーブ色が混じった地味な色合いである。私が聞いた鳴き声は「ピポピビピュリリリピピュリ ポリピビポピリリ」みたいな（勝手にイメージしてください）、柔らかくてリズムカルな美しい声だった。

春から初夏にかけては若葉を食べる毛虫が多く発生するが、それをエサにして鳥はヒナを育てる。この時期は巣から落ちたスズメの幼鳥などをよく見かけるが、我々が育てるのは難しいので、そっと元の場所に（道路は避けて）置いておくのがよい。親鳥が近くに見守っていることが多いので何とかするだろう。たぶん……。



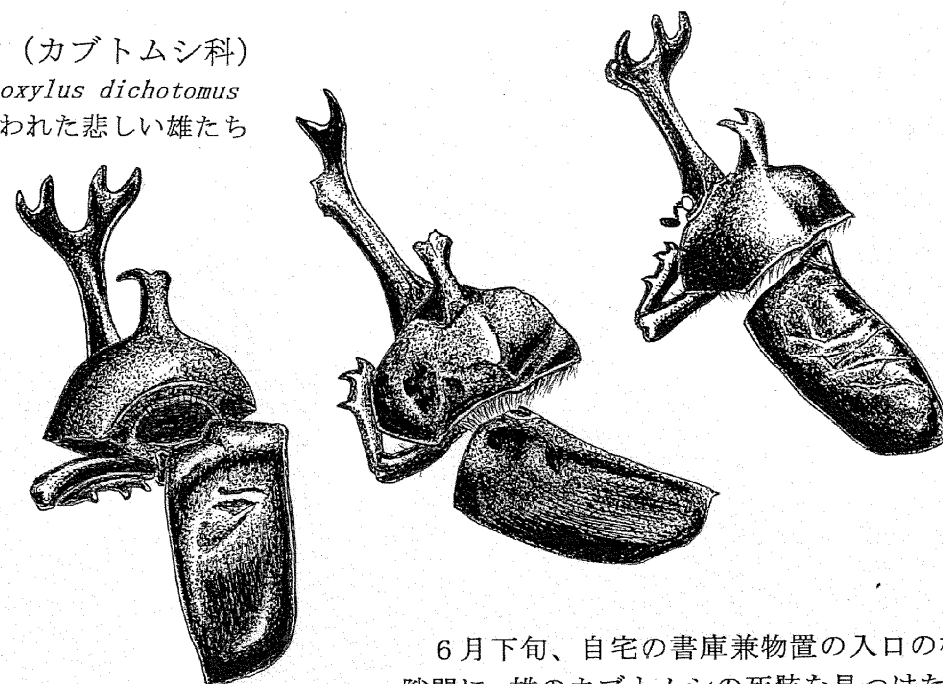
イソヒヨドリ 磯鶇
(ヒタキ科) 雄 若鳥
学名 *Monticola solitarius*

夏空を見ずして草生す 兜ども

カブトムシ (カブトムシ科)

学名 *Trypoxylus dichotomus*

カラスに食われた悲しい雄たち



夏草や

兵どもが

夢の跡
芭蕉

6月下旬、自宅の書庫兼物置の入口の柱の隙間に、雄のカブトムシの死骸を見つけた。完全に外骨格のみ空っぽ状態になっており、かなり時間がたっていることがわかる。今年羽化したものなのかも不明である。いったいどこから入り込んだのだろうか？野生カブトムシが入り込むだろうか？私が持ち込んだ記憶は全くないが、もし持ち込んでいて、それを覚えていないとしたら、私の頭も空っぽの骨格のみになっている可能性がある。

7月19日、西脇市の地球科学館「テラ・ドーム」を訪れた。梅雨は明けていないが相当に蒸し暑く、夏本番を思わせる。用を済ませてゆっくり周辺の自然観察をしようと思ったが、暑さに負けて駐車場付近だけを歩き回った。10分ほどの間に、草むらにカブトムシの死骸を3つ見つけた。どの死骸も腹の部分が無くなっており、鞘翅や前胸部に強く挟まれたような傷跡がある。なぜかすべて雄で、みな同じように鞘翅1枚と前胸部と頭部が残っている。おそらくカラスが捕食したものの残骸であると思われる。

夏の雑木林や公園ではよくカブトムシやクワガタの頭胸部を見かける。柔らかい腹部だけが食われている状態なのだが、胸部についた前脚がまだ動いているものを朝の公園で見つけたこともあった。カラスが捕食しているのは間違いないようであるが、夜行性のカブトムシをカラスはいつ襲うのだろう。小型のタカであるチョウゲンボウは日中、盛んにセミをとらえて食べる。後にはセミの固い頭部だけが残されている。鳥にとっては夏の森や林は格好の餌場である。カブトムシは大きいので食い応えがありそうだ。虫酒場では樹液を独占する無敵の雄カブトムシだが、カラスに対しては無力なのが悲しい。

3つのカブトムシの死骸を集めて並べると『夏草や 兵（つわもの）どもが 夢の跡』という松尾芭蕉が岩手県平泉で詠んだ句が思い浮かんだ。「奥州藤原氏が滅んで、その栄華の跡も今は夏草が茂るだけだ」という解釈だが、私は、「戦国の合戦の後、討ち死にして骸になった侍の鎧兜が草むしっている」というように勝手に解釈し、草むらに落ちているカブトムシの亡骸にイメージを重ねているのだ。昆虫の外骨格はキチン質という固い物質でできていて腐りにくい。カブトムシの死骸もセミの死骸や抜け殻も長く残っている。